



漢詩を味わう

第113回

かがみにてらしてはくはつをみる
照鏡見白髪

ちようきゆうれい
張九齡

宿昔青雲志

しゆくせき
宿昔 青雲の志

蹉陀白髮年

さだ
蹉陀たり 白髮の年

誰知明鏡裏

だれ
誰か知らん 明鏡の裏

形影自相憐

けいえい
形影 自ら相憐れまんとは

昔は、末は大臣宰相と大きな夢をいだいたものだったが、挫折を重ねて、むなしく白髮の年となった。誰が予想しただろう、鏡のなかで、自分と鏡にうつった自分とが、互いに相憐れみあうことになろうとは。

《照鏡》鏡にうつして顔を見ること。

《宿昔》むかし。

《青雲志》高位高官のことを青雲の上とか、青雲に昇るといふことから立身出世の志。

《蹉陀》つまづくこと。

《明鏡》磨き込んだ鏡。

《形影》自分と鏡にうつった自分。

張九齡（六七三—七四〇）は、初唐から盛唐にかけて玄宗皇帝の世で活躍した政治家で、張説の腹心として宰相にまでのぼり、詩人としても有名でした。

この詩は、張九齡の全集「曲江集」には「照鏡見白髮聯句」として収められています。聯句というのは、何人かがかわるがわる句を作って一首の詩とするものです。五言絶句の場合、普通は二句ずつ二人で作るようですが、一句ずつ四人で作る場合もあります。実際にはこの詩が本当に聯句なのか、聯句であれば何人で作られたか、また張九齡が作ったのはどの句なのか不明です。いずれにしても張九齡は宰相というこれ以上ない地位まで登り詰めていて、彼の感慨としてこの詩を詠んだものではないようです。聯句は前句をうけて即興で作るために面白い詩境が展開されていき、中国では古くから作られています。日本でも平安時代に詩会の余興に行われ、何人かが歌を詠み継いでいく日本の連歌に影響を与えたと言われます。この詩も宴席の余興として詠まれた詩なのかもしれません。

昔の鏡は銅製で、磨き込んで使います。鏡に映った自分を見て感慨を覚える詩は、一手法として昔から多くの詩に見えます。白居易の「鏡（鏡に感ず）」では、恋人が残していった鏡を久しぶりに取り出して自分を映すとやつれ切った自分がいていっそ悲しみがつのる、と詠んでいます。またこの張九齡の詩に最も似通った詩として、「白髮三千丈」で始まる李白の秋浦歌（其十五）があります。今回の昇格試験課題でした。

人は誰しも大きな夢を描き、そしてほとんどの人は志を得ぬまま年老いるのです。だからこそ、この詩は昔から李白の秋浦歌と同様に、多くの人々に愛誦されて今日に至っているのでしょう。

李白詩・秋浦歌（其十五）

白髮三千丈 緣愁似箇長 不知明鏡裏 何處得秋霜

参考文献・唐詩鑑賞字典（東京堂出版）・中国名詩選（岩波文庫）

旅館の寒燈独り眠らず 客心何事ぞ転た凄然 故郷今夜千里を思う 霜鬢明朝又一年

旅館寒燈獨り眠らず 客心何事轉凄然
郷 今夜思千里 霜鬢明朝又一年

高適詩 除夜作 丙午臘月 高適書

《大意》 旅館の寒々としたとしびのもと、独り眠られぬ夜を過ごしている。わが心はどうしたことか、ますます悲しみに沈んでいく。故郷の家族たちは、大みそかの今夜、はるかな旅時にある私のことを思いやってくれているだろう。この白髪の身は、夜が明ければ、さらに一つ年をとるのだ。

(高適詩・除夜作)

冷澹たり孤山の月 高寒たり半夜の霜

冷澹孤山月
高寒半夜霜

高適詩 除夜作 丙午臘月 高適書

《大意》 冷ややかでしずかな孤山の月、空高く寒い半夜におりる霜。

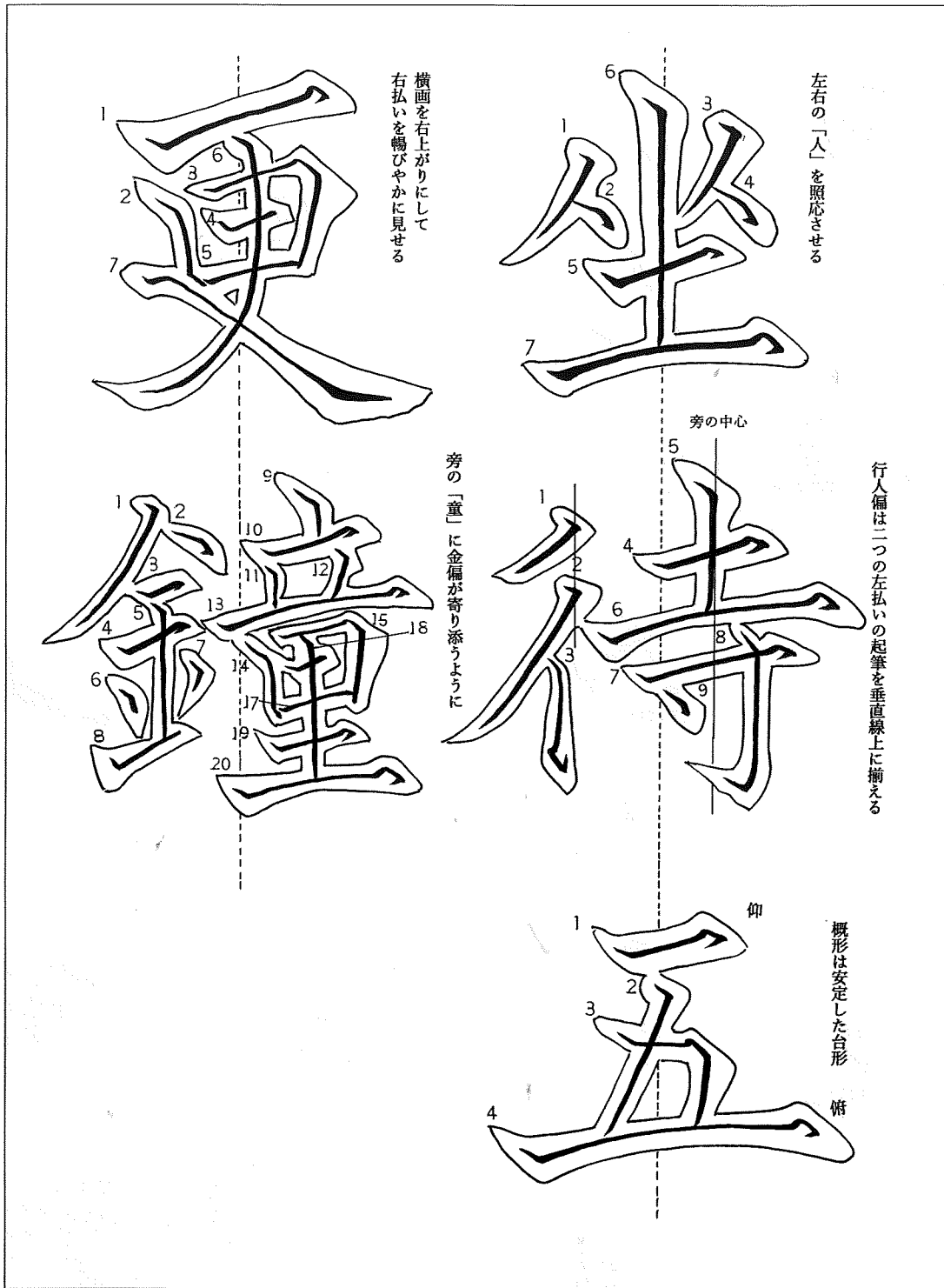
冷澹孤山月
高寒半夜霜

高適詩 除夜作 丙午臘月 高適書

坐待五更鐘

読み
坐して待つ五更の鐘（横臥せずに坐して夜明けの鐘がなるのを待つ。「良寛詩投宿・其の二」）

佐藤象雲書



- 一般部規定課題出品について
- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
 - ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
 - ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

更鐘 坐待五

更鐘 坐待五

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

次号課題

隸書

我有一壺酒

更鐘 坐待五

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

松風水月

松風水月……

■ 褚遂良・雁塔聖教序

(初唐・西曆六五三年)の臨書(45)

象雲臨

『松風水月』

昭和初期に川谷尚亭が著した「楷書階梯」という楷書の参考書があります。様々な古典を取り上げてその習い方や注意すべきことをまとめているものです。その中で楊主守敬がこの雁塔聖教序について、「昔人其の烟の青空にたおやかにそよぐ如き、最も形状を良くす。」ものであるが、「美人嬋娟、羅衣に勝へずと嗤って澆漓(うすつべら)となす。後学軽佻(けいちよう)を為すものに痛く一鍼を下す。原書は紙を離ること一寸と雖も実に筆を下すこと千斤……」と述べています。要するに、美人の羅衣のように薄っぺらいものではなく、細くても鉄線を曲げて成したような強い線である。というわけです。さらに筆の使用法のあらん限りを見せていると絶賛しています。陰陽俯仰法の妙を尽くしているの、初心者が直ちに着手すべき古典ではないとも付け加えています。私たちがその線の太さに惑わされずに強い線を書くことが肝要です。

鴻飛獸駭

鴻飛獸駭(之資)……

■孫過庭・書譜(初唐・西曆六八七年)の臨書(27)

象雲臨

鴻飛 獸駭

【鴻飛獸駭】

前回の「奔雷墜石の奇」に続いて、今回も自然現象を例えにして、古来の名跡の筆法の変化を表現している言葉です。漢字はそれ自体が抽象的なものですから、書かれている言葉の内容と直接関係を持つ必要はないと思いますが、今月の文字は「鴻飛」は恰も鳥が飛ぶように軽やかで、「獸駭」の獸は特に勇猛な線で書かれています。時にはその文字の意味を含んで書くことも表現法の一つのようにも思います。

書譜には佳言名句がたくさん登場しますが、文章自体が四六駢儷文といわれる文章で故事を引用して対句を用いるという華麗な文体で書かれていて難解です。しかし、解説書や漢和辞典などを参考にその内容に触れることは益することが多いと思います。